仏教を身近にする伝道誌　　浄土真宗を弘める会

道標（どうひょう）

dohyo

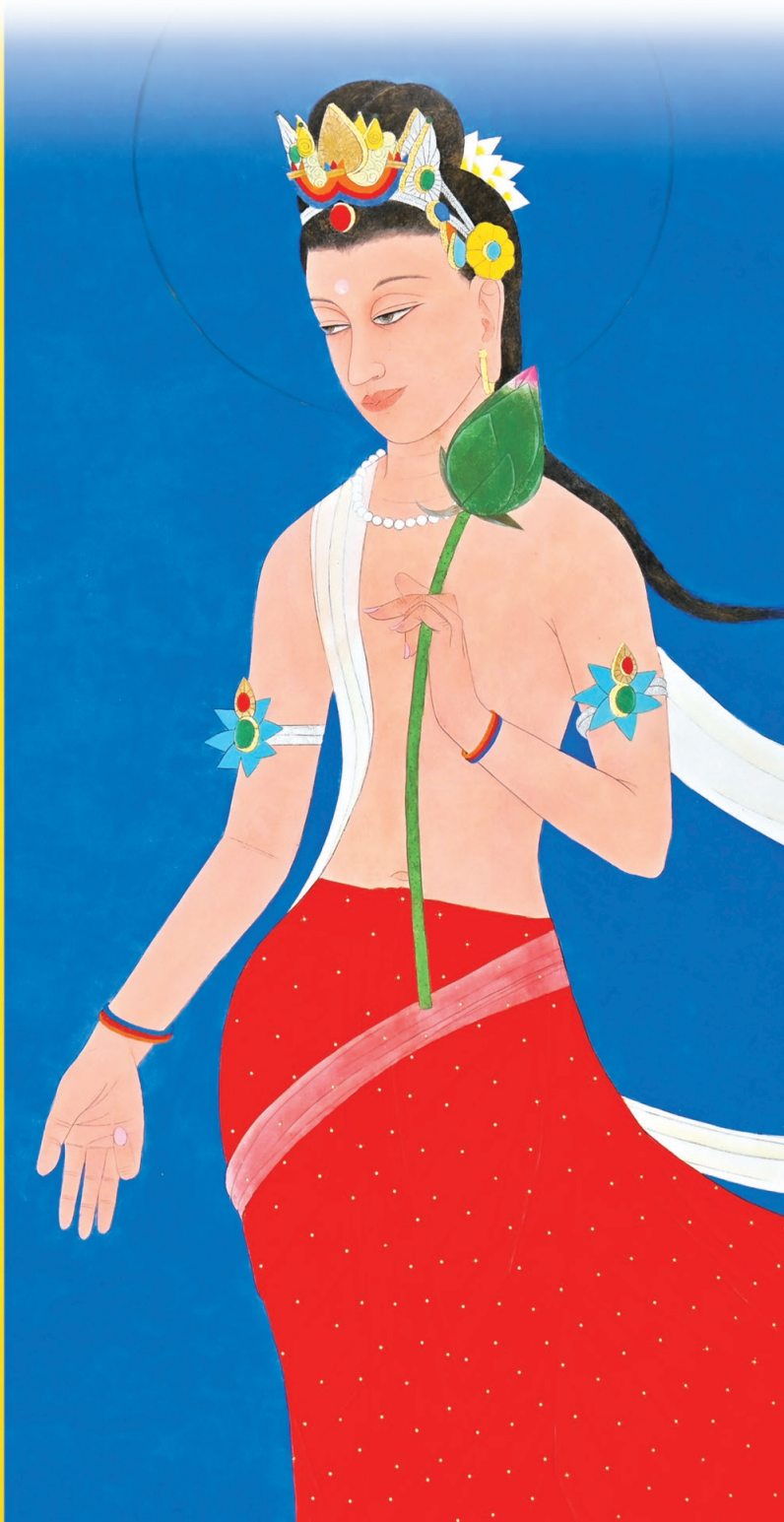
2022 夏季号

年間特集 「ふしぎ」

第三回・不思議の解明　横尾忠則さん

連 載

あなたのいのちの物語　死生の真実と悲しみを知る
伝承を科学する　能楽における「不思議」
道しるべ　よろづ真あることなし



年間特集「ふしぎ」

不思議の解明

第三回 横尾忠則さん

寒山拾得・其ノ二
2021年
キャンバスに油彩
162.1 × 130.3cm

常識では理解できない。科学でも説明できない、そのような事象を「不思議」という。われわれの周辺は不思議で満たされていると思う。それを解明しようとするところから知識欲が生まれるのであろう。不思議は不思議として、放っておいたらいいんじゃないか、と僕は思う。知ることが知識を豊かにするかもしれないが、知らないことがあるというのも実は豊かである。

子供の頃は知っていることより知らないことの方が多かった。だから次から次へと探求心が生まれるのだが、知ってしまうことで不思議が失くなる。大人と子供の違いは不思議に満たされているか、どうかで決まるような気がする。大人になるということは子供時代の不思議が失くなっていくことではないだろうか。

不思議を抱えることは、自分の中に物語を抱えることである。不思議を失くした大人は心の中から不思議を排除した者のことを言うように思う。知らないことは知らないと言えない大人になっていくと、どうなるかというと理屈っぽい人間になるということだ。知らないことは感性を豊かにするが、それに対して知らないことを恐れる者は、ますます観念的な人間になって面白くなくなっていく。

そして不思議な事象を全て否定していく。科学が解明するものだけを信じ、目に見えないものは、存在しないものとして排除していく。そして、やがて物質至上主義の唯物論者になっていく。信じられないもの、不思議なものには価値がないものとして決めつけてしまう。幽霊、UFO、テレパシーのようなものは人間の幻想が創造したものとして、あらゆる超常現象を否定して、そうしたものをオカルトとして、この世の中から排除して、安心するのである。彼らにとってはまるで死を意味するかのように不思議なものは恐ろしいのである。

言い方を変えれば不思議なものは死を意味するのである。自分の肉体が全てで、肉体という物質が、この世から消えてなくなるのを最も恐れているのである。見えないもの、不思議なものは全て肉体の向こう側のものとして、見えるもの以外は存在しないのである。従って死によって肉体が消滅したら、世界の終わりなのである。だから唯物主義的な人は、人間は死んだら無になると信じているのである。だから肉体が存続している間が全てである。だからつい、享楽的な人生を求めるのである。

よくお葬式などに行くと、弔辞を読む人の大半が、「やがて俺もそっちに行く、そして向こうで酒を呑み交そう」と如何にも来世があるかのように語る人がいる。こういう人に限って唯物主義的な人が多く、来世なんて全く信じていないのである。とにかく死ほど不思議なものはない。死を解明することは生を解明することだと思う。何が不思議だといっても死以上に不思議なものはない。不思議の最後の砦は死である。

不思議を抱えることは、自分の中に物語を抱えることである。

これを解明するのは仏教であろう。2、3年前に、「死は存在するか、また転生は？」という日本の一流の仏教者と学者によってシンポジュームが開催され、その記録を本にしたのを読んだことがある。ところが驚いたことに、ほぼ出席者の全員が、死は「無」であり、転生は「ない」という結論を出していた。

これが西洋近代主義の思想に犯された仏教界の現実である。この瞬間、不思議はこの世の中から消されてしまった。死の存在を評価するかしないかで生き方が決定される。

以前、生存中の瀬戸内寂聴さんが、フランスのテレビ局の取材で、「輪廻転生（りんねてんしょう）」について、質問をされているのをテレビで見た。その時、瀬戸内さんは輪廻転生を「ない！」と即答された。フランスのテレビ局の人達は西洋近代主義の行き詰まりを、日本の有名な作家であり僧侶の口から、「ある！」という言葉を期待していたらしく、瀬戸内さんの即座に否定された態度にポカンとしていた。この時、僕は愕然とした。瀬戸内さんの中には相手がフランス人というので、彼等の肩を持ったつもり、リップサービスをしたつもりで、つい咄嗟（とっさ）に輪廻転生を否定してしまったのであろうかと思う。また瀬戸内さんと故石原慎太郎さんとの対談の中では、石原さんは、「人間は死んだら無だと、確信を得た」というようなことをおっしゃった。日本の二人の知性の発言に僕はがっかりしてしまった。不思議の否定である。

死の側から生を見つめている僕の中の視点

日本の歴史的な仏教の文献の中でも輪廻転生は絵画を含め、その存在は色々な表現で説かれている。にもかかわらず、日本の知識人はなぜか死も輪廻も転生も否定したがる。このことによって西洋的知性の知識人になったとでも思っているのであろうか。僕は別に仏教を学んだことも宗教に気触（かぶ）れたこともないが、自分の中の本性（魂）が死の存在や輪廻転生のシステムを肯定している。そしてこの肯定が自分の人生と絵を描くという創造の根底に深くかかわっている。

撮影　横浪 修

そして、死の側から生を見つめている僕の中の視点を常に感じとっている。生と死を二つに分離するのではなく、両者を共有することによって僕自身を存在せしめている。従って生の終わりが死の始まりである。肉体から霊へと存在の仕方が変わるだけである。肉体の死は霊の誕生ぐらいに思っている。死を解明することは不思議の解明になるかどうかはわからないが、尚かつ不思議が残るなら、それはそれでいいと思う。不思議をいじくり廻して、不思議を不思議と思わなくさせることにどれほど意味があるのだろうか。放っとけばいいと思う。

この「道標」で「不思議」について何か語ってほしいと依頼された時、仏教と不思議。これは実は仏教の根本原理に触れる非常に重大なテーマではないかと思った。不思議を解明していくと、知らず知らずに仏教に話が結びついていく。僕は子供の頃から、超自然現象という不思議につきまとわれていて、この年令（85才）になってもまだ、不思議現象が、生活、人生の一部になっている。

横尾忠則（よこおただのり）
美術家。1936年 兵庫県生まれ。
ニューヨーク近代美術館、パリのカルティエ財団現代美術館など世界各国の美術館で個展を開催。
2011年 旭日小綬章、同年度朝日賞、
2012年 神戸に横尾忠則現代美術館開館。
2013年 香川県豊島に豊島横尾館開館
2015年 高松宮殿下記念世界文化賞、
2020年 東京都名誉都民顕彰
他受章多数。
著書に『ぶるうらんど』（文藝春秋　泉鏡花文学賞）、『言葉を離れる』（講談社エッセイ賞）、『原郷の森』（文藝春秋）他多数。
横尾忠則現代美術館にて「横尾忠則 寒山拾得への道」を開催中　（7／18まで）

Your Spiritual Stories
あなたのいのちの物語

17話目

「死生の真実と悲しみを知る」

坂口 安吾
『桜の森の満開の下』

主人公は怖いもの知らずの山賊の男だが、桜の森の満開の下にいると怖ろしくなるのは不思議だ。男は多くの都からの旅人から奪ったもので暮らし、女房も七人いた。八人目の女をさらって来たが、いつもと違うのは女が美しすぎ、亭主を殺したことだ。そのせいか、この八人目の女はあれこれと要求が多い。家に着くと、女房を次々と殺すように要求する。召使いにする女を残して他の女たちは皆、山賊に殺させる。美しさに我を忘れているようだが、我に返って怖い気になるのは桜の花の下の気持ちと似ている。

やがて女は都に連れていくように求め、三人は都に住むようになる。男は夜毎に女の命じる邸宅に忍び入り、着物や宝石や痩身具とともにその家に住む人の首を持ち帰る。女は毎日、首遊びをする。首同士が恋をし、女の首が男の首をふったり、男の首が女の首を泣かせる。娘の首に汚い首の腐った肉がへばりつき、牙のような歯にくいつかれ、鼻の先が欠けたり、毛がむしられたりもする。女はその娘の首をさらに傷めつけ、投げ出したりする。

だが、やがて男は都の暮らしがいやになる。都の生活は彼には退屈だ。そもそも人間がうるさい。また、女の欲望にキリがないことも退屈だ。女は常にキリもなく空を飛びつづけている鳥のようなものだが、彼はそんなことはできない。ある日、「とびきり美しい白拍子の首をもってきておくれ」と女に求められると、男は「俺は厭だよ」という。そしてある夜、一本の花咲く桜の木の下に寝ていて、彼は山に帰ることを思い立つ。

そのことを女に伝えると、女は初めて涙を流す。だが、男の意思が固いことが分かると、女は「私も一緒に山へ帰るよ」と言う。もはや山賊の男なしには生きられなくなっていたのだ。「お前と首とどっちか一つを選ばなければならないなら、私は首をあきらめるよ」と女はいう。二人は山へ帰っていく。

女をおぶって歩いていくと、鈴鹿山の桜の満開の森にさしかかる。満開の桜の花の下に入ると、男はふと女の手が冷たくなっているのに気づく。とっさに彼は女が鬼であることがわかる。どっと冷たい風が吹き寄せる。男の背中にしがみついているのは、全身が紫色の老婆で、口は耳まで裂け、ちじれた髪は緑だった。鬼の手に力が入り喉に食い込み。男の目がかすんでいく。男は夢中で逃れ、鬼を背からふり落とし首をしめる。ふと気づくと女は死んでいた。桜の花びらが屍体の上にふりかかる。男は女をゆさぶり、呼び、抱いたが、もはや生き返ることはない。男はワッと泣きふし、我にかえると彼の背には白い花びらがつもっていた。

そのとき、男の心には怖れがなくなっていた。彼は初めて桜の森の満開の下に坐り、いつまでも坐っていることができると感じる。もう帰るところがない。それは孤独の場なのだ。ひそかに花が降ってくる無限の虚空に男はいた。そしてただ二つ、なまあたたかい何物かを感じた。それは彼自身の胸の悲しみだ。花と虚空の冷たさの中に悲しみだけがあり、女のからだも彼自身のからだも花びらのなかで消えていた。

桜の森の満開の花の下で、人は死生の真実を知り、まったき孤独に向き合い、この世の愛憎を超えた虚空のような魂のふるさとと消えない悲しみに出会う。この物語はそんな安吾の想念を結晶させている。

島薗 進（しまぞの すすむ）
1948年生れ。東京大学教授、上智大学教授を経て、現在、大正大学客員教授、上智大学グリーフケア研究所客員所員
著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生――帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちを〝つくって〟もいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。

伝承を科学する

能楽における「不思議」

室町時代に作られ、現代まで演じ続けられた能楽の物語の数は、およそ二五〇にのぼるが、劇中「不思議やな」という表現がしばしば聞かれる。パソコンで全文を検索してみると、三〇〇件をこえるが、その多くは、主役（シテ）ではなく、ワキによって発せられる。

ワキが扮するのは多く、旅をする僧侶である。僧侶の前に、その土地の人（シテ）が現れて、土地で起こった昔の出来事を語る。物語をつうじて、その人の素性が明らかになる。やがて、あたりの風景は変わる。僧侶の読経の声、あるいは夢の中に、幽霊や霊魂や神体が登場する（後シテ）。こういう展開の中で「不思議やな」という言葉が繰り返し発せられる。

〈殺生石〉という作品の中でみてみよう。〈殺生石〉のワキが扮する役は、玄翁という名の高僧である。金槌の名としても、よく知られている名であろう。

奥州から都にむかう途上、玄翁は下野の国（今の栃木県）那須野の原に到着する。その玄翁の前に、一人の女（シテ）が現れ、声をかける。目の前にあるのは、生き物の命を奪う殺生石という石。すぐに立ち退くがよい。その石には、昔の玉藻の前という女の執心が封じ込められている、と。それを聞いて玄翁は「不思議なりとよ玉藻の前は、殿上の交はりたりし身の、この遠国に魂を、留めし事は、何故ぞ」と言う。このようにワキの「不思議」は、まずはシテが発する言葉の中身に向けられ、さらにそこから「何故ぞ」と、新しい問いが生まれる。

〈殺生石〉（シテ：浦田保親）（c）Yasuchika Urata
石が二つに割れて後シテが登場する場面

さて、那須野の原は今、秋の夕べ。もの凄まじい風景である。シテの女は物語を始める。玉藻の前は、出自不明の女だったが、容姿も美しく知恵や才能があり、宮廷で大切にされていた。ある秋の夜の宮廷での音楽会。にわかに雲行きが怪しくなり、強風で灯りが消え、あたりが真っ暗になった。そのとき、玉藻の前の体があやしく光を放ち、宮廷を照らした。それを機に、帝は体調を崩してしまったのである。玉藻の前が化け物であるとわかり、その魂は、陰陽師によって、那須野の石に封じ込められてしまったのだ、と。語り終わると女は、自分自身が、その封じ込められた石魂である、恐れられるな、と告げて消える。

ワキが、その石魂を救済すべく、石の前で仏事を始めると、石は真二つに割れて、石魂が出現する。ワキが「不思議やなこの石二つに割れ、光の中をよく見れば、野干の形はありながら、さも不思議なる仁体なり」と声を上げる。このように、目の前の風景が変わり、思いもかけない者が出現するとき、能のワキは「不思議」を声にする。

ところで、那須野には今も本当に殺生石がある。ことし二〇二二年の三月、その殺生石が、真二つに割れたという、驚きのニュースが伝えられた。まさに「不思議やな！」であるが、那須野が実在の場所である以上、そこを舞台とする能の物語も、単なるフィクションではないと思わねばなるまい。女（石魂）と玄翁のやりとりも、今にも蘇りうるリアルな物語なのだ、と。

藤田 隆則（ふじた・たかのり）
一九六一年、山口県生まれ。
京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。研究対象は、能・声明などの中世芸能および音曲。
著書に『能のノリと地拍子』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えるための応用的研究に従事。

道しるべ

天岸浄圓（あまぎし じょうえん）
1949年（昭和24年）生まれ。本願寺派布教使。
行信教校講師、大阪教区東住吉組西光寺住職。

よろづ真あることなし

新型コロナの世界的拡大の脅威を撥ね飛ばすように、ロシアのウクライナ侵攻が開始されて以来、原稿に向かっている今の時点で二ヶ月が経過している。連日報道されるウクライナ各地に展開する凄惨な戦況。

しばらく前に『阿弥陀経』の「而雨曼陀羅華」の言葉をご紹介した。浄土では一日六回、天上から芳しい華が散らされるとあった。今まさに逆、空から、地上から、砲弾が雨降らされ、その戦禍を逃れようとする人びとの姿は、地獄の業火に追われる様を呈している。

両者共に、自国のためはもちろん、世界の世論を巻き込むためのプロパガンダの情報戦、その溢れんばかりの中から、何を聞き受け、いかなる判断が正しいのか量の多さに振り回されるばかりである。民族的に、歴史的に、地政学的に、経済的に、国際的にと、さまざまに原因を追及し、解説しても、人びとに殺人を強い、殺し殺され、家族を失い、失わさせ、日常の穏やかな生活を脅かさせる、正当な理由を見いだすことは不可能である。

また、勝敗によって両者に平安が訪れることは決してない。いずれ勝敗がつくとしても、勝者には思い上がりが、敗者には忘れることのできない屈辱、憎悪、怨念が、埋み火のように燃えつづけ、いずれ報復の火と燃え上がることは必然である。

「煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに」

（歎異鈔）

といわれるように、正邪、善悪、勝敗、いずれも空言、戯言である。まさに虚しく愚かという外はない。

ただ、その言葉の真意を感受するための代償は、あまりにも膨大といわねばならない。いずれにしても、一日も早く殺戮を止める外に愚の連鎖を止める道はない。

編集後記

度重なるコロナの波、今年も未だ中々収束しないでいる。そこにロシアによるウクライナ侵攻である。地震、洪水、疫病にそして戦争。まさかこんなことが起こるなんて！その連続である。

そんな時勢の中、美術家、横尾忠則氏に今回の特集のテーマ「不思議」についてお考えをたずねてみた。

全てを明らかにしていく飽くなき探求心や知性をもって人間の可能性や自由を追求する西洋近代主義。横尾氏はどうやそれに疑問符を持たれているように思える。それは結果として地球や人類が破滅させられるような「核」を産み出し、世界各地で起こる気候変動や様々なひずみをもたらしている。実際に今、我々はまさしくその現実の中にあり、困惑しているのである。

「不思議は不思議のままでいい」と自然体で横尾氏はおっしゃられる。親鸞聖人は夢のお告げで数多くのご和讃をしたためられた。見えない世界からのメッセージ。かつての先人らが抱いていた霊性や死生観に基づく知性や価値観がこんな時代を生き抜くヒントや光となるのではないか　と。

表紙の絵　観音・勢至

愚かな独裁者によって戦争が起こる。それは過去の教訓からも明らかであるが、現実に現代でも独裁者がまかり通って戦争が起こっている。そして一般庶民は恐怖に怯え、生活に困窮する。物事全て自分に置き換えて考える精神が必要である。殴られれば痛い。刺され、撃たれれば血が流れ、ついには死に至る。これも因縁であるが決して定命ではない。

仏教者は「一切の生きとし生けるものはしあわせであれ、安穏であれ」と願う。人を殺すことは人として最も悪しき行為である。

仏の教えの基本は「自ら殺してはならない。また他人をして殺さしめてはならない」と説かれている。

大悲大慈の観音、智恵の光の勢至の菩薩道を歩む心を持とう。

畠中光享（はたなか こうきょう）
日本画家／インド美術研究家
／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい
株式会社 廣瀬佛檀店
0120-81-7065 ☎06-6771-7007
タウンページ http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/（詳細地図有り）
〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪2丁目1-12
（四天王寺西門交差点　西へ30m）